
超常

ヤギ男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超常

【Z-コード】

N1702F

【作者名】

ヤギ男

【あらすじ】

実在した涼宮ハルヒに動搖した俺、これからどうなる？

シン 僕のあだ名だ（前書き）

見ない方がいいと思います

シン 僕のあだ名だ

超常、なんてのはたいてい信じられないことだ。 まず始めに、宇宙人

この平凡たる日常に、目が一つしかない、指が三本しかない、手からビーム！なんてのがあると、世界の物理法則が大きく変わってしまう。 困るし 教科書変わるしで、何やら大変な事になつてしまつだろう。

そして、未来人

そんなものがいると、化学が進みに進みすぎて、困つてしまいそうだ。

そもそもいきなり

「私、未来人なんです」なんていうやつはいないだろ。 そして信じる奴もいなだろ。

最後に、超能力者

まず簡単に考えてみよう 超能力にはいろんな種類がある、動物と喋れたり 時間を操つたりしたりして楽しそうだか・・・ 深く考えてみよう、もし 超能力者軍団が襲つてきたらどうするか。俺達の なすすべないだろ とにかく、まったく後悔している。まさか実在していたとは、そんなこと思いもしなかつたからなん？誰かつて？

涼宮ハルヒ

まあなんて早い事だつ いつの間にか高校生だからな、全く俺も老けたなあと思った。

そういうや、部活まだ決めてなかつたなあ。

何にしようかなどと考えていたら、自然とバスケットボール部と書いていた、まあ別に困ることなんてないしな。

でな事で部活決定！たゞたか・・・・・

「ちよつ・・・何つスか！？」

とリアクション芸人みたいになつてゐる俺を、引きずるのは、涼宮

ハルヒ?いや、んな訳無い。
ありやあ架空の世界だ有り得る

ああああああ！――！――！――！

「皆が持てせ所へ部員の真衣部屋だ！！

豈お得かせ新・詮釋の真不眞表

周りはやはつ、キヨン、古泉、長門、朝比奈さん だった。

「やじたるの世話を1と2と3と4が前は自分ですね」

「おいハルヒ。その・・真太郎君とやらが困つてこるぞ」

ありがとうございます、キヨンー！ あんたは最高だ！

「氣のせいです！」

これまたいきなり何でだよ

んまあなんだかんだで、試合の日が来た！

・・・メンバーはポイントガードハルヒ、シュー・ティングガードオレ、センター・キヨン・・・・古泉達の場所は?

「ああ、彼らは守りよ！アタシ達が攻撃」
つて事はハルヒさん、三人で攻撃して二人で守るといいたい
のですか？「そうよ」

ここはバスケの事など
試合が始まる！

微塵にもわかつてねえ。

そしてついに

相手チームは長瀬ケラフという社会人チームだ。ジャンプボールは俺がして、何とかハルヒに渡す

「ナイスシン君！！」
いつの間にあだ名を付けたんだ。

かなりの速さで敵を撃ち落す。といふ間に、シーリーはトを決めた。

敵はかなりの団結力があり、マジで強そうだった。だが、俺、
ハルヒ、キヨンのカット＆シューートがかなり効いたのか、試合は
45対10だった。「」の調子で次もやるわよ「へいへい、わか
つてるよ

その日の帰り道・・・

「おい、君バスケやらなーいか？」

うちの学校のバスケ部だつた

5'

そういうわるとなんか嬉しい。

「うるせえ！……てめえは黙つてろ……」

なんとハルヒを突き飛ばしたのだ。

「お前ら！……やめろ！」

「フン！……」

「ドゴー！……」

という二ブイ音をたてキヨンを吹っ飛ばした。

「かは！……」

キヨンはうずくまつて腹を押さえている。

「先輩方その話お断りします」

「なに？そんなにその変な団がいいのか？」

「ああ、確かに最初は嫌だつたさ、正直いうとなだが今日わかったよ。なんだかんだで俺はSOS団が好きだつたんだな、皆が皆楽しそうにバスケしてさ、今までにない最高の試合だった！だから・・・・・そんな大事な仲間傷つける奴はぜつて一許さねー」

その時俺は相当キレイていた。自分でわかる、殺氣がそいら中に撒き散らしてあつたからな

「わわかつた！悪かつた」

すぐくおびえている先輩を俺は・・・・

「もう遅い」

俺はキヨンのよじにしてしまつた・・・・

驚いているハルヒを見て 僕は我に返つた。

「え・・・あ・・・う・・・え・・・つと大丈夫つスか？」

「うつうん・・・・・」

「おつおれは・・・・」

「あ・・・忘れてた・・・・

「おい！重傷の俺を忘れるな

「あはははは！……」

ハハハハつかんか空気が 戻つたな・・・・。そして次の日

次は優勝候補の田尻高校 だ。どうやらここで負けみたいですよハルヒさん 「まだ負けと決まつたわけじゃないわ！最後まで頑張る

のよ！――

まあ頑張りますが・・・
するとキヨンがこっちを見て。

「アイツ変わったな」

「へ？」

俺は疑問に思つた・・・

たいして変わつたところなんてないと思つのですが・・・
「あいついつも絶対勝てだつたんだが、今は最後までだ。だいぶ代
わつたぜ？」

そうか・・・試合が始まつた！

ジャンプボールは、なんなくとり、ハルヒに渡した。だが相手がハ
ルヒにトリプルチームをかけた 「ハルヒ！」

ボールは何とかキヨンに渡つたが今度はダブルチームをかけられ、
ついに ボールは相手にわたつてしまつた。

相手はわざと中に入らず スリーポイントをついた しかもなんな
くショートを決め、あつという間に 24対10になつた。
もうみんな諦めていた。ハルヒはかなり怒つていた。・・・怒つ
ていた？ ベンチにいる古泉が電話をしている。何やらマズイ事に
なつていなきやいんだが・・・
ブー！！！

「タイムアウト！」

古泉がタイムアウトをとつた！・・・やべーな・・・

「どうやら閉鎖空間が出来てしまつたようです。」

聞こえた・・・

盗み聞きするつもりはなかつた・・・

だが聞いてしまつた。

「先輩方俺にもその話聞かせてください」

「おや聞いていたんですか？」

「すみません・・・」

「いやいざれ教えなければいけなかつたので。まあ、あとでゆづく

り教えてあげます」

そしてタイムアウトが終わった、勝たなきゃいけねーな。

「ハルヒさん、俺がゲームをつくる」

そういうつて俺は、真ん中から突っ込んだ！そして不可能なところから
パスを出した！

ハルヒの流石の反射神経でパスを取り、ショートを決めた。

これが何度も決まり、何とあと一本差になった。あと5秒・・・

俺は無謀に突っ込み、 ショートをうつた！

しかしゴールに嫌われ、 ボールは高く舞い上がった。

入れ！！

ブー！！！

試合終了・・・

50対48で負けた・・・

帰った後俺はおもつきり泣いた後、すぐに寝た。

「シン君！！！」

俺はその声に反応して、 起きた。

ハルヒがいた・・・

ん？ここは・・・

閉鎖空間・・・

だつた。

「キヨンは？」

辺りを見ると・・・

いた・・・変なかつこうでのびていた・・・

先輩起きてくださいよー

「ん・・・シンか・・・」 やっと起きた・・・

「何でまた変なところにいるのよ・・・」

「とにかく部室へ行きましょう。」

つてなことで部室に着き またしてもハルヒは自分で行ってしまつ

た。

「古泉はまだかなあ
俺はキヨンに聞こえるようにいつた。

「・・・・・」

「長門からのメッセージも来ないなあ
ついに古泉が来た。

「遅いぞ古泉」

「いやあすみません・・・シン君に何と言えばいいのかわか・・・
「いや、説明はいらない」

「つといいますと?」

「ここは閉鎖空間・・・アンタは超能力者、長門は宇宙人、朝比奈
さんは未来人だ」

「・・・・!」

「そして、ハルヒは

「進化の可能性」

「時間の歪み」

「神」という事だよな」「あなたはいつたい・・・

俺は後ろを向き言った

「俺は一般人・・・・が良かつたんだが・・・・」

「つという事はあなたが・・・・」

驚いている古泉と、今度はなんだと言わんばかりの顔をしているキ
ヨンに言った。

「試作品1号不純物不完全型有機生命体暴走システム搭載の宇宙人
に造られた宇宙人もどきそ」

この言葉で、一気にシーンとなつた。

「シンおまえ自身どうやってわかつた?」

「閉鎖空間にきてからだ」

「お前はその前からの記憶があるじゃないか

「俺の頭ン中にかなり精密なマイクロプログラムを染みこませれて
いたんだ。」

「・・・・といひでお前はなんだなにができるんだ」

「長門とほとんど同じだ」

「ほとんど？」

「言つたろ？ 暴走システム搭載つて
つといつて腕を見せた。

紋章があつた。

「なんだ？」

「この紋章には特別な超能力者の全ての力が入つていて。この紋章を一度取ると能力が飛躍的によくなる、がリスクもある。暴走してそこにいる奴らはほとんど……死ぬ」

「…」

「とにかく後頼みます」

振り返ると古泉はもうきえていた。

「おでました！」

「な！？」

そして、ついに神人まで出て来てしまつた。

「んじゃ・・・後頼む」

「つて待てよ、別に神人は倒さなくともいんじゃねーか！」

「あの時、何もなかつたと思ってたのか？」

「あの時現実世界にも神人がでてきたんだ」

「まさか・・・」

「気にすんな。終わり良ければ全てよし！」

「そうか・・・」

「俺の身に何かあつたら・・・ハルヒに宇宙人に拉致されたとでも言つてくれ」

「あいつは俺の情報を重要視しないぞ」

「さあな・・・」

俺は笑顔でいつた。

この数日でこの世界が凄いことになつてゐることがわかつた。楽しかつた・・・

「そんじやあ、ちょっとくらあ行つてきます！…」

俺は窓から飛び出し神人のとこへ向かった。

シン キヨン

「どうする？・・・アイフル」

なんて変な事いつてる場合じゃねえ！・・・ハルヒを探さねーと・・・
・探さなくてよかつたみたいだ。ドアを開けた瞬間、目の前をにハルビがいた。

「あ！キヨン！・・・なんか出てる！・・・夢で見た巨人が出てきてる！・・・
もう夢じゃないわよね！？感覚だつてあるんだから！・・・」

まあまあ落ち着くんだハルヒさん。攻撃されたら一気にペッチャンコだぞ？俺はまだ死にたくねーよ。

「大丈夫よ！・・・なんか安心するのよ！・・・」

どんな根拠があつてそんな事が言えるんだ？

ドスーーン！――――――――

大地が大きく揺れた。

窓の方を見ると、神人が倒れていた。

「何々？」

ハルビが外を覗いた。

「キヨン・・・・誰あれ？」

疑問に思つた俺は、外を覗いた

何とそこには、変わり果てた、シンの姿があつた。

右腕が化け物のような形をしていて、右眼はアニメに出できそうな化け物の眼だつた。

そして後ろには悪魔のような幻影がうつっていた。

「シン・・・・・

暴走したんだな・・・

「シン・・・君？」

ハルヒはドアを飛び出し、シンのとこへ行ってしまった。

「ハルヒ！ 行くな！！！」

俺はハルヒを追いかけた。

「シン君！――！」

キヨン シン

「ぐ・・・る・・・な・・・！――！」

俺はまだその時意識があった、

「あ・・・・・・・」

ハルヒはかなりおびえた。

スマン・・・危害を『えたくないんだ。

俺はハルヒをギロッと睨んだ。

ドクン！――！

「ぐつ――！」

マズイ意識が・・・・・

苦しんでいる俺を見てハルヒが

「シン君！――！」

後ろから抱きついてきた！――！

「！――ば・・・・はなれ・・・・」

振り向いた瞬間ハルヒの唇が俺の唇に重なっていた。
ビックリした！――！

つと思つていたら既にベットの上にいた。俺はそのまま朝まで放心
状態だつた。ただ今3時1分・・・・・・

学校に着くとハルヒが校門の前で俺を待っていた。

「おはようシン君」

「どうも」

これからが一苦労だつた。
谷間に腕を挟んだ。
何故かハルヒは俺の腕を掴み

なんかいい空気になつたからちょっと触るへりこ・・・
いや触つてないぞホント

「あつ！エッチな事考えたでしょ！」

ちよ・・・腕を胸に押し付けないでくれ！理性が理性がああ！！！

まわりがすんげえ眼で見てるし！ホントマズイですよハルヒさん！
まわりからみたら付き合つてているみたいに見えますよ！！「いいじ
やない別に」

なにがいいものか。キヨンにせつてやれば良いものを。

「キヨンは私の奴隸だからそんな事しないわよ」

つてな感じで、わがSOS団の部室の中に入った。予想通り長門が
いた。

「どうも長門さん」

「・・・・・・」

返事ぐらいあつてもいいだろ。

「・・・・・どうも」

まつこんな感じか、つとキヨンがトサカみたいな寝癖で來た。

「シャキッとしてください」

「ほつとけ」

わかつたよ、あんたの事だ、全然寝れなかつたんだろう？そこいら辺で
寝といつぐださい。

つと言おうとしたらもうすでに寝ていた。

ガチャ

又誰か来た。振り返ると既に半泣きの朝比奈さんが
「あ・・・あ・・・」つとつ泣いてもいゝみづな声をしていた。

「やあ、朝比奈さん・・・」

「シンくーん！..」

俺はギリギリのタイミングで、朝比奈さんが抱き着くのを阻止した。
そして心中で
(ハルヒさんに見られたらどうなるかわかりませんよ)
といった。

どうやらわかつたらしくねつと後ろにさがった。

「あっ、『めんなさい』！」

「いえいえ、私もボーッとしていましたから」

古泉、あんたはいつからそこにいたんだ。

まあなんだかんだでメンバー全員が集まつた。そして放課後、長
門に呼び出された。言われたのは

「貴方の世界に戻す事が出来る。」

ビックリしたな俺は元々この世界の住人かと思つてたからな。

「・・・どうするの？戻る？」

考えるまでもなかつた、俺の答えはもつとつと出でるからだ。

「いやまだいい」

「やつ」

ああまだやることがある。

古泉とボードゲームで勝利したい。長門に本でもプレゼントしたい。
朝比奈さんのコスプレ衣装もみたい。キョンの本名が聞きたい。ハ
ルヒとキョンの仲を引っ付けたいってものもあるな。
まあ一番やりたいことは、又、皆でバスケをやる」とこれでぬき
る・・・・・

ちょっとだけ後の話

「キヨン君、シン君が来てるよ」
「なに？」
外を見ると確かにいた。
ドアを開けると
「よつ！キヨン」
「せつかくのSOS団の休みなのになんだよいきなり」
あんなに元気いっぱいのハルヒが休んだから俺らも休みって事になつたのだ。
「いや、大事な話だ」
「またおれの不安要素が増えたか？」
「いや、実は…今日で俺のいた世界に帰るんだ」
いきなりだったので固まつてしまつた。
「待てよ、なんで帰るんだ。」
「俺が又いつ暴走するかわからない、そういう前に、俺は帰るんだ」

それ以上何も言えなかつた。

「じゃあ俺はこれで…」

「お、おー」

「あそづれ、妹さんと言ひといてくれ

「何をだ？」

「君が大好きだつた

「…・・・・・は？」

「何回か会つてたんだよ

「いつの間に・・・

「それでは・・・・

いつの間にかシンは消えていた。

あいつがどこに行つたかは知らないだかあいつはいにいにいた。

確かにいた。

俺は妹に言つた。すると

「私も好きだよ？またデート行けるかな？」

「デートしたのか！？」

「うん、キスもしたよ

シンいろいろな思い出ありがと 次会つたら詳しい事聞かせてください。

いや聞かせる。

END
....

シン君付き合つて?
....
はい?

次回は妹さんと付き合つ
キヨン、妹さんの名前教える。

シ　俺のあだ名だ（後書き）

見ないでって言いましたよね？

五年後（前書き）

りゅうとじやせーです

五年後

あれから5年。俺はあのHARIBOWorldにいた。辺りを見回した、変わったところといえば北高が新しくなっていたことぐらいだ。

さて古泉が迎えにくると「だが つと遠くに見えるのは誰だ。ん? 女? ポーテールで口り、ありや高校生だな。

「シンくーん」

この声どつかで聞いたことが……

「やっぱりもどつてたんだ」

キヨンの妹さん…か?

「そうだよ? 大人っぽくなつたでしょ?」

「子供じゃなくなつたな」

「もう、前も子供じゃなかつたもん!」

かわいくなつたなこいつ、そういうのが子供なんだよ。といひで古泉は?

「機関の人呼んでつて言われたの」「ん? 何故知つている?

「古泉君が死に際に教えてくれたの全部

死に際つて……

「古泉君ね、神人にやられたんだつて
古泉がしん…だ? ……
涙が出てきた。

「シン君どうしたの? ……きや ……?」

俺はキヨンの妹に抱き着いた。

「大丈夫すぐ泣き止むから、それまで……」古泉が死んだ。

その言葉に連れたい一心で俺は妹さんに抱き着いた。

「シン君…」

「「めん、キヨンや朝比奈さん達は?」

「キヨン君は病院にいるよ」

「キヨンはどうしたんだ？」

「つりん、キヨン君じやなくてハルヒさん」

「…………へ?」「

「ハルヒさん、キヨン君と結婚してるんだよ。病院にいるのは妊娠してるから」

「ぐ、ぐ……」

まさかとは思つたがそのままかとな。

「朝比奈さんは未来に帰つてるよ」

そうか、今頃

「白雪姫つて知つてます?」とか聞いてんだろうな。

「長門さんは……よくわかんないけど色んなプログラムを作つてるよ」

ついに何が得意かわかつたな。「んじゃあとりあいす、病院に行くか。

「うん!」「

俺の目の前にいる女の子は、満面の笑みでそいつた。

病室にはいると、ハルヒとキヨンがいた。

「よつ!」「

「おつシンじやねえか、いつ戻つたんだ?」「

「ん~ちよつと前」

ハルヒは寝ていた。かなり腹はふくれていた。

「いつなんだ」

「今日だ。」「

「そつか……」

話が続かん……

「シン君は彼女いるの?」「

「そーいうのを唐突に聞くんじやありませんー」

「いねーよ

「じゃあさ、私と映画館いー」

「まあいいが…」

なぜ…?とばかり思つていた。

まあなんだかんだで映画館に行き、ボーッと映画を見て外に出た。

「よくわからんなかつたな」

「うん…」

そのあと俺は妹さんに連れられてホテルっぽい所についた。

「なんだここは…」

「まあまあ!」

よくわからんまま、俺は中に入れられ、部屋に入った。

「なんだよ…」

「シン君さ、私の事好きって言つてくれたよね

「ああ言つた」

「キス…してくれた」

「…ああ

「私、嬉しかつた。だから

「…だから?」

「もう一回して…」

「…ああ

俺は彼女の肩をもつて優しくキスをした。

「…シン君…」

「ん?」

「Hしょ…?」

流石にビクッたね。でも好きだからいいよな。

俺はそつと彼女の服を脱がした。そして胸に手をやつた。

「ん!ハアハアシン君!」

俺は彼女の○○○に指を入れた

「ああ!…んんん!…イクッ!…イクッ!…

「！」

彼女の○○○からいやらしい汁が出ている。
俺は中に挿入した。

「あん！あああ！気持ちいい！」
「ハアハアハア、うつああ！！」

中に出でしました。

多分だかこれが付き合ひの原因だったのかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1702f/>

超常

2010年12月5日06時00分発行